

はくあい

H A K U A I

発行所:博愛社/〒532-0028 大阪市淀川区十三元今里3丁目1-72/TEL06-6301-0367 FAX06-6301-5347
ホームページアドレス <https://hakuaisha-welfare.net>



せいあがないぬし
← 輝く白さの聖 贖 主教会 →



博愛社創立130周年記念事業として、聖贖主教会の修繕工事を行いました。主に外壁全面塗装を中心に行い、光触媒の特殊な塗装を施し、美しい白さの教会に生まれ変わりました。



教会について、もっと知りたい方は博愛社のホームページをご覧ください。



**改修工事を
終えて**

【こひつじ乳児保育園】

昨年始めに大阪市より改

修工事補助金の知らせがあり、かねてから傷んできていた給食室の改修と、保育室のサツシの取り換えを計画しました。難しいと思われていたのですが、8月ごろ決定通知が送られてきて、そこからバタバタと計画が進められました。

コロナ禍で感染対策をとりつつ、11月21日から12月10日の間に工事が行われ予定通り完成しました。

いつもであれば寒くなりだすと隙間風や結露に悩まされていましたが、サツシを2重サツシに変えたことで解消され快適に過ごす事が出来



見通しのいい給食室

ています。リニューアルした調理場では、給食の先生達がスムーズに動けるようになったり、子ども達からも調理場が良く見えるようになったので、給食の先生達に声をかける姿も多くなりました。

給食室の改修とあって改修中は子ども達には温かい給食を出すことが出来ず、その間配達のお弁当になりました。また、工事の音も鳴り怖い思いをさせてしまう事もありました。保護者の方々にもご協力をいただき本当に感謝しています。今後も子ども達の過ごしやすい環境を考えていきたいと思えます。【早川 育子】

四季折々

「幼稚園から幼保連携型認定こども園へ」

私は一昨年の9月末まで、学校法人が運営する博愛社学園幼稚園で勤めていました。面接時、「数年後に幼稚園は閉園し、社会福祉法人運営の認定こども園になる」と知らされました。見えない未来に期待と不安を抱きましたが、自分が卒園したこの園で働きたいという気持ちが強く、希望を胸に入職しました。月日が流れ、幼稚園は昨年9月末に閉園しました。

そして10月、こども園が開園しました。保育園、幼稚園の教育・保育の違い、礼拝の進め方などでギャップが生じ、立ち止まることもありました。しかし、その都度、話し合いを重ね、お互い理解を深め、昨年10月1日に創立1周年を皆で迎えることができました。今まで保育園、幼稚園と働く場所は違ってもここに



いる全員が「子どもが好き」でこの職業に就き、集まりました。子ども達の笑顔を見るのが一番の幸せです。このような場を与えてくださった神様に感謝の心を忘れず「キリスト教教育・保育」に励みたいと思います。

今後も改善や一致の必要な所はまだありますが、子ども達、保護者の皆様が「博愛社こども園に通えて良かった」と感じられるような施設を目指し、これからも一歩ずつ進んでいきたいと思っています。

【博愛社こども園 小沼 あずさ】

- ▽個人 1口 3千円
- ▽法人 1口 1万円
- ▽個人 1口 1万円
- ▽法人 1口 1万円
- ▽郵便振替口座番号 092074676
- ▽口座名義 社会福祉法人 博愛社

「子どもが好き」でこの職業に就き、集まりました。子ども達の笑顔を見るのが一番の幸せです。このような場を与えてくださった神様に感謝の心を忘れず「キリスト教教育・保育」に励みたいと思います。

【坂本 康一朗】



7か月ぶりの対面面会

【サテライト特養 清心館】

清心館では、11月より約7か月ぶりに家族との対面面会を再開しました。面会は感染防止のため、10分以内でアクリル板を間に設置して距離を置いて行うなど様々な制限があり、待ちに待った面会に物足りなさを感じられた事とありますが、面会後は「やっぱりお互いに直接元気そうな姿を見ることが出来、とても良かったです」と喜ばれていました。

しかし、その喜びもつかの間、11月に入り大阪府内は感染者が増加。行政からもより一層の感染拡大防止策の徹底を求められ、清心館も短い実施期間で「対面面会の休止」と苦渋の決断に至りました。ご予約頂き面会出来なかった家族様には大変申し訳ありませんでした。新型コロナウイルス感染が終息し、思う存分に会える日が来ることを願うばかりです。

【宇野 豊】



距離はあっても心は近くに

秋刀魚

入居者の前で焼きました

【特別養護老人ホーム 博愛の園】

昨年11月25日、博愛の園の廊下を歩いていると、炭の良い匂いがしてきました。コロナ禍で行事や外出が制限される中、ユニットリーダーの篠田、鈴木の名が率先して「お年寄りに何か特別な事をした」と行動してくれました。ベランダにバーベキューセットと炭を用意し、季節を感じていただけるように秋刀魚を焼き、更には



魚を焼き、更にはホットケや鮭と老若男女共通して好きな肉も用意してくれました。匂いにつられ入居者の視線の先は、ベランダに。いつになく、皆さん食事がすすみ「えらいご馳走やなあ」と喜んでおられました。「秋刀魚は炭の火力が落ち着いてから」と玄人篠田の一言に、早くも第二回が期待されます。

特別な冬休み

【児童養護施設 博愛社】

年末年始はコロナ禍により、子ども達にとって楽しみな外出泊や行事を我慢しなければならなくなりました。そんな

状況下だからこそ、会えない保護者や週末里親さん、大切な人に年賀状や、電話をして繋がりを持ちました。

ホームで楽しく過ごせるよう、ボードゲームやパズル等で遊び、新しい玩具で職員も一緒に楽しみました。また、初めて手打ち蕎麦に挑戦し、手作りの年越し蕎麦を楽しむ子や、けん玉の技を競い合う

子ども達、TVの特別番組やレンタルDVDの映画を夜更かしして鑑賞するなど、お正月ならではの楽しみがありました。

グラウンドへ出れば、各ホームや年齢に関係なく自然に集まり、賑やかで楽しい雰囲気生まれて、みんな遊びを楽しむなど、外出泊や行事だけではない楽しさを感じる

ことが出来たように思います。

毎年、年末年始には多くの卒業生が来社しますが、それが出来ないことで新年の挨拶を年賀状や手紙、電話を通して伝えてくれました。職員にとっても子ども達にとっても、今年は大変な繋がりをより感じることができたのではないのでしょうか。 【高谷 鮎美】



みんなで協力してパズルに挑戦

寄付・寄贈に感謝

【児童養護施設 博愛社】

恒例のお餅つきは出来ず、業者に依頼してついてもりましたが、出来立てのお餅に子ども達は大喜びでした。

また、(株)ダイヘン様からのご寄付を、ウィリアムス館の改修工事や防災用品の購入に使用させて頂くこともできました。ご寄付・ご寄贈を頂いた方々に感謝します。ご芳名は次号に記載させていただきます。 【磯 悦子】



今冬も迎えた火入れ式

【博愛社 こども園】



理事長のお話にも熱が入ります

次第に寒さが増してきた11月も半ば、今冬も博愛社子ども園では薪ストーブの火入れ式を行いました。子ども達の集うランチルームの大きな薪ストーブはこども園の自慢の1つです。その日を楽しみにしていた子ども達は「あったかい！」と顔が綻び、自然と手をかざしていました。

当日は理事長先生も来てくださり、薪の入れ方を教わったり「温度はどのくらいでしょう？」と出してくれたクイズに嬉しそうに答えています。「200度！」という数字にはよくわからないながらも驚きの声も漏れていました。その日のおやつでは薪ストーブで焼いたほくほくの焼

き芋をいただきました。味は格別！寒い冬も薪ストーブに灯る火で、温かくてほっこりとした空間をみんなで喜びたいと思います。

【近藤 彩理佳】



じっと見入る子ども

今年度はコロナ禍で大変な状況ですが、そのような中でも、児童養護施設の子も達のために多くの寄付・寄贈を頂きました。毎年ゲームソフトなどの寄贈をくださる方からは、シルバニアファミリーの豪華なセットを頂き、子ども達は楽しく遊んでいます。サンタさんに会えなかったのは残念でしたが、例年通り多くの企業・個人の皆様からクリスマスケーキやお菓子等沢山のプレゼントを頂きました。



豪華なシルバニアファミリー



【特別養護老人ホーム
博愛の園・清心館】

博愛社高齢者事業では、現在4名のベトナム人が働いています。昨年春に介護の専門学校を卒業し、正規職員として1年目ながらも「特養清心館」で素晴らしい働きをしてくれるベートさん。「特養博愛の園」

では、昨年12月から「特定技能1号」として転職してきた明るいリンさん。そして新型コロナウイルスの影響で1年近く来日が遅れた「技能実習生」のランさんとナムさんが1月から働き始めました。

片言ではありますが、一生懸命日本語でのコミュニケーションを図ろうとされ、素敵な笑顔でお年寄りからも気に入られています。博愛社での働きで、よき日本の介護と文化を学んでもらえればと思います。

【川田 誠】



左からナム、ラン、ベート、リン (敬称略)

林正二死後十周年を記念して出版された『思出草』(表紙の題字は実之助)という小著がある。正二は兄勝之助の北海道移住の思念を引き継ぎ、釧路国音別の地に子どもを招き拓殖事業に携わった経緯をもっている。この開拓の思念は、一九二〇年の博愛社創立三十年記念事業として北海道胆振国勇払郡オロロップの地に展開される。この件については以前、『三代の社会事業史』にもカツエの思い出として数回に亘り連載された。ここでは開拓初期の様子を『博愛の園』でみておこう。

実之助は一九二一(大正十年)、「旧臘二月二十四日付を以つて許可せられたる北海道胆振国勇払郡オロロップの地に展開される。この件については以前、『三代の社会事業史』にもカツエの思い出として数回に亘り連載された。ここでは開拓初期の様子を『博愛の園』でみておこう。」

海道胆振国勇払郡オロロップ原野の新殖民地に移住すべき本社出身者の十戸団体の中四戸のものを準備先発隊として引率同地に送るべく、余等夫妻は主任の水谷豊氏夫妻を初め張遠聲君其他一行合せて八名啓行する事となれり(二一九号)と

八日は一日休みて朝と夕に二回の集会、仕事は手につかず、あらん限りの御馳走にて、自作の甘藷に川から釣つて河魚の御馳走、今日は目出度日なればと小豆飯に下鼓を打ち(二二一号)とある。『穂別町史』にも一九二二年に「福山区(オロロップ)に大阪博愛社団体・岩手団体・滋賀団体入植(四四五頁)と記録されている。さらに同年十一月にも実之助夫妻が訪れる。「到れば早

やくも恰然一村落をなし、思恩館を中心に団体の家屋、豚舎、鶏舎等を合せて数棟出来上り、殊に今回は団員二名が新たに結婚式を挙ぐる都合にて、団員のもの総掛りにて十日間の日子を費して、新たに教会堂を建築し、この建物が殖民地の小高き丘に聳然として建ち言い得ぬ快感を覚えぬ」と。そして「我がオロロップ農場は教会の新築と共に左の憲法を制定して団員一同の生活の方針となせり(二二三号)と報じている。この思恩村憲法は五条から成り、一条「天地の主宰なる独り、一条「真の神を信仰し住民互ひに相愛すべきこと」、二条は「労働は神聖なり神聖の労働は宗教なりとの信念をもつこと」とある。しかしこの開拓事業は残念ながら、非常な困難をきわめ挫折していく。つまり自然の下でのびのびと教育するという博愛社の理想郷の夢は叶わなかったが、勝之助の夢、弟正二の試み、そして博愛社記念事業として展開された事実も博愛社史の一駒として残しておく必要がある。可能性として理想の継続は、いつの日か形を変えて蘇るかもしれない。失敗も博愛社の重要な歴史である。

室田 保夫(関西学院大学名誉教授)

北海道拓殖事業—オロロップ開拓

博愛社の歴史探検 [32]